

大学生の同一性と時間的信念

新見直子・前田健一

Identity and time belief in university students

Naoko Niimi and Kenichi Maeda

本研究では同一性を同一性達成度と同一性感覚（自己斉一性・連続性，対自的同一性，対他的同一性，心理社会的同一性）に分けて考えた。同一性達成度得点に基づいて，対象者を高群，中群，低群に分類し，同一性感覚の4つの下位尺度得点について3群間で比較検討した。さらに，同一性達成には時間的展望が関与していると考えられることから，時間的信念の2つの得点（展望主義得点，現在主義得点）について3群間で比較検討した。その結果，①心理社会的同一性下位尺度では3群間に差がみられ，高群が中群や低群よりも，中群が低群よりも有意に高かった。②自己斉一性・連続性，対自的同一性，対他的同一性の3下位尺度では，高群が中群や低群よりも有意に高かった。③時間的信念の展望主義得点では高群が中群や低群よりも有意に高かった。しかし，現在主義得点では3群間に有意差はみられなかった。

キーワード：同一性，同一性達成度，同一性感覚，時間的信念

問 題

青年期の発達課題とされる同一性達成についてはこれまで様々な研究がなされている。同一性の達成過程に関する研究では同一性を拡散から達成まで連続的に捉えるための様々な尺度が開発されている（例えば，下山，1986，1992）。下山（1992）は，大学生を対象にして，青年期の職業決定と同一性達成度との関連を検討している。重回帰分析の結果，積極的に職業選択に取り組む「模索」は同一性の達成度に正の影響を与えるのに対して，職業選択を回避する「回避」や職業決定について具体的に考えることができない「拡散」は同一性の達成度に負の影響を与えていた。職業選択の態度が青年期の同一性達成度と強く関連していたことは，下山（1992）の使用した尺度が同一性達成度を測定する尺度として妥当であることを示唆する。しかし，杉村（2001）は女子大学生を対象にして職業決定前後の同一性を検討した結果，職業決定後に同一性レベルの低下を示す者が多くみられることを報告している。下山（1992）と杉村（2001）の結果を考え合わせると，職業選択の態度は同一性達成度に影響するが，いったん職業を決定した後では同一性達成度が再び低下する場合もあることがわかる。その意味で下山（1992）の同一性達成度尺度は，あくまで測定時点における同一性達成度を反映しており，測定時点が異なれば変動することもありうると考えられる。

ところで、同一性の概念はいくつかの要素から構成される概念であると考えられている。谷(2001)は、同一性感覚に関する Erikson (小此木訳編, 1973) の考えに基づいて、同一性感覚について4つの下位概念を設定している。第1の「自己斉一性・連続性」は、自分が自分であるという一貫性をもっており、時間的連続性をもっているという感覚であり、自己の不変性および時間的連続性についての感覚である。第2の「対自的同一性」は、自己意識の明確さの感覚である。第3の「対他的同一性」は、他者からみられているであろう自分自身が、本来の自分自身と一致しているという感覚である。第4の「心理社会的同一性」は、現実の中で自分自身を意味づけられるという、自分と社会との適応的な結びつきの感覚である。谷(2001)は、これら4つの下位概念に基づいて、自己斉一性・連続性、対自的同一性、対他的同一性、心理社会的同一性の4つの下位尺度から構成される多次元自我同一性尺度(以下 MEIS; Multidimensional Ego Identity Scale)を作成している。

谷(2001)は、充実感尺度(大野, 1984)と MEIS の4つの下位尺度との関連を検討した結果、充実感尺度が MEIS の4下位尺度のすべてと有意な正相関を示すことを見出している。大野(1984)によると、充実感は健康な自我同一性を統合していく過程において青年が感じる自己肯定的感情であると定義されている。この定義からすると、大野(1984)の充実感は、本研究で使用する下山(1992)の同一性達成度と類似した概念であるように思われる。下山(1992)の同一性達成度と MEIS の4下位尺度(谷, 2001)との関連を直接検討した研究はみられないが、大野(1984)の充実感が下山(1992)の同一性達成度と類似しているならば、同一性達成度は充実感と同様に MEIS の4下位尺度と有意な正相関を示すと予想される。本研究の第1の目的は、同一性達成度の高、中、低の3期間比較と相関分析を通して、同一性達成度と MEIS の4下位尺度との関連を検討することである。

同一性の達成過程においては、自分の過去、現在、未来を連続的に捉える時間的展望が重要である。Rappaport, Enrich, & Wilson (1985)は、過去、現在、未来の具体的な出来事を一本の直線に書き入れるライン・テストを使用して時間的展望を測定し、同一性達成との関連を検討している。その結果、同一性の達成群は拡散群よりも未来の出来事を多く記述していた。この結果は、同一性達成度の高い者ほど現在から未来への時間的展望をもっていることを示すものである。都築(1993)は、過去、現在、未来を円で描き表すサークル・テストを使用して、時間的展望を測定し、同一性達成との関連を検討している。その結果、同一性の達成群が拡散群よりも時間的展望を強く示した。

本研究の第2の目的は、同一性達成度と時間的展望との関連を検討することである。本研究では現在と未来を連続的に捉える傾向(展望主義)と、現在と未来を切り離して捉える傾向(現在主義)に分けて測定する。同一性達成度と時間的展望に関する先行研究の結果(Rappaport et al., 1985; 都築, 1993)を参考にすると、同一性達成度の高群は低群よりも展望主義得点が高く、逆に現在主義得点が低いと予想される。

方 法

調査対象者

広島大学の大学生 125 名(男子 41 名, 女子 84 名)を対象とした。後述する同一性達成度尺度得点の平均値 ($M = 3.37$) を基準にして、これら 125 名の対象者を $0.5SD$ (0.36) 以上の高群, $0.5SD$

以下の低群, および平均値±0.5SD の範囲の中群の 3 群に分類した. その結果, 各群の人数内訳は, 高群 39 名 (男子 12 名, 女子 27 名), 中群 49 名 (男子 17 名, 女子 32 名), 低群 37 名 (男子 12 名, 女子 25 名) となった.

調査内容

(1) 同一性達成度尺度 下山 (1992) の作成したアイデンティティ尺度を構成する 2 つの下位尺度の中から, 「アイデンティティの確立」下位尺度の 10 項目を用いた. 「アイデンティティの確立」下位尺度は, 他の「アイデンティティの基礎」下位尺度よりも青年期の同一性達成度を測定するのに適していたからである (下山, 1992). 対象者は, 各項目内容が自分にどの程度あてはまるかを 5 段階 (1: まったく, あてはまらない~5: とてもよく, あてはまる) で自己評定した.

(2) 同一性感覚尺度 谷 (2001) の MEIS を用いた. この尺度は 20 項目から構成され, 5 項目ずつ自己斉一性・連続性, 対自的同一性, 対他的同一性, 心理社会的同一性の 4 下位尺度に分かれている. 対象者は, これら 20 項目について, 各項目内容が自分にどの程度あてはまるかを 5 段階 (1: まったく, あてはまらない~5: とてもよく, あてはまる) で自己評定した.

(3) 時間的信念尺度 白井 (1997) の時間的信念尺度から内容の類似した項目を除いて, 8 項目の時間的信念尺度を構成した. 8 項目のうち 4 項目は展望主義下位尺度を構成し, 残り 4 項目は現在主義下位尺度を構成する. 対象者は, これら 8 項目について, 各項目の内容にどの程度賛成するか反対するかを 5 段階 (1: 反対~5: 賛成) で回答した.

手続き 3 つの尺度別に調査用紙を作成し, 3 回の講義時間を利用して集団で実施した.

各尺度の得点化の方法

(1) 同一性達成度尺度 同一性達成度尺度の 10 項目に基づいて, 因子分析 (主因子法, 直交 Varimax 回転) を行った. その結果, 表 1 に示すとおり, 1 因子構造が確認された. また, これら 10 項目の内的整合性も高かった ($\alpha=.89$). 以下の分析では 1 項目あたりの平均値を算出し, それを同一性達成度得点とした. したがって, 得点の範囲は 1 点から 5 点であり, 得点が高いほど同一性達成度が高いことを示す.

表 1 同一性達成度尺度の因子分析結果

項目	因子 1	共通性
1. 私は, 目標を持つと, その実現に向かって頑張る方である	.65	.42
2. 自分の生き方については, 自分なりに納得している	.68	.46
3. 私は, どんときも自分を信頼している	.71	.50
4. 私は, 自分の意志で, 自分の生き方を選んでいる	.77	.59
5. 自分は, 何かを成し遂げることでできる人間だと思う	.75	.56
6. 社会の中でどう生きるか, 自分の生き方が見えてきた	.58	.34
7. 自分には, まとまりと一貫性があると思う	.66	.44
8. 私は, 自分を大切にしている	.62	.39
9. 私は, 自分なりの価値観を持っている	.61	.37
10. 私は, 魅力的な人間に成長しつつあると思う	.72	.51
二乗和	4.59	4.59
寄与率 (%)	45.85	45.85

(2) 同一性感覚尺度 谷 (2001) の因子分析の結果に従って下位尺度を構成することにした。表 2 は、谷 (2001) の因子分析の結果に従って、自己斉一性・連続性 ($\alpha=.84$), 対自的同一性 ($\alpha=.85$), 対他的同一性 ($\alpha=.83$), 心理社会的同一性 ($\alpha=.79$) の 4 つの下位尺度別に質問項目を示したものである。同一性感覚の 4 つの下位尺度得点は 1 項目あたりの平均値である。したがって、各下位尺度得点の得点範囲は 1 点から 5 点であり、得点が高いほどそれぞれの同一性感覚が高いことを示す。

表 2 同一性感覚尺度項目

自己斉一性・連続性 ($\alpha=.84$)

- * 1. 過去において自分をなくしてしまったように感じる
- * 5. 過去に自分自身を置き去りにしてきたような気がする
- * 9. いつのまにか自分が自分でなくなってしまったような気がする
- * 13. 今のままでは次第に自分を失っていってしまうような気がする
- * 17. 「自分がない」と感じることもある

対自的同一性 ($\alpha=.85$)

- 2. 自分が望んでいることがはっきりしている
- 6. 自分がどうなりたいたのかはっきりしている
- 10. 自分のすべきことがはっきりしている
- * 14. 自分が何をしたいのかよくわからないと感じるときがある
- * 18. 自分が何を望んでいるのかわからなくなることがある

対他的同一性 ($\alpha=.83$)

- * 3. 自分のまわりの人々は、本当の私をわかっていないと思う
- 7. 自分は周囲の人々によく理解されていると感じる
- * 11. 人に見られている自分と本当の自分は一致しないと感じる
- * 15. 本当の自分は人には理解されないだろう
- * 19. 人前で自分は、本当の自分ではないような気がする

心理社会的同一性 ($\alpha=.79$)

- 4. 現実の社会の中で、自分らしい生き方ができると思う
- 8. 現実の社会の中で、自分らしい生活を送れる自信がある
- 12. 現実の社会の中で自分の可能性を十分に実現できると思う
- * 16. 自分らしく生きていくことは、現実の社会の中では難しいだろうと思う
- * 20. 自分の本当の能力を生かせる場所が社会にはないような気がする

* 逆転項目

(3) 時間的信念尺度 表 3 は時間的信念の下位尺度項目を示したものである。4 項目ずつからなる展望主義下位尺度 ($\alpha=.62$) と現在主義下位尺度 ($\alpha=.52$) のそれぞれについて 1 項目あたりの平均値を算出した。したがって、各下位尺度得点の範囲は 1 点から 5 点であり、得点が高いほど展望主義、現在主義の傾向が高いことを示す。

表3 時間的信念尺度項目

展望主義 ($\alpha=.62$)	
1.	今をしっかり生きることが、将来を明るくすると思う
3.	自分の夢をかなえるために、がんばるのが人生だと思う
5.	今がつかなくても、将来のためなら、がまんすべきだと思う
7.	今していることの大切さは、後になってから、分かるものだと思う
現在主義 ($\alpha=.52$)	
2.	今が楽しければ、それでよいと思う
4.	今の生活は、将来の生活と関係ないと思う
6.	どうなるのか分からない先のことを考えても、しかたがないと思う
8.	将来のために、今、努力するのは、バカらしいと思う

結 果

3 群間比較の結果

(1) 同一性感覚下位尺度得点 表4は同一性感覚の4つの下位尺度別に3群の平均値を示したものである。各下位尺度別に1要因分散分析を用いて3群間の比較を行った。その結果、いずれの下位尺度においても群の主効果が有意であった。すなわち、自己斉一性・連続性では $F(2,122)=14.39$, $p<.001$ で、対自的同一性では $F(2,122)=15.42$, $p<.001$ で、対他的同一性では $F(2,122)=4.15$, $p<.05$ で、心理社会的同一性では $F(2,122)=22.61$, $p<.001$ でそれぞれ有意となった。多重比較 (Ryan 法; すべて $p<.05$) の結果、自己斉一性・連続性、対自的同一性、対他的同一性の3つの下位尺度では、高群が中群や低群よりも有意に高かった (自己斉一性・連続性では $t=3.71$; $t=5.27$, 対自的同一性では $t=4.03$; $t=5.39$, 対他的同一性では $t=2.38$; $t=2.65$)。それに対して、心理社会的同一性下位尺度では、高群が中群や低群よりも (順に $t=4.64$; $t=6.60$)、中群が低群よりも有意に高かった ($t=2.36$)。

(2) 時間的信念下位尺度得点 表4に示す展望主義下位尺度と現在主義下位尺度の2つの得点についても同様の分散分析を用いて3群間の比較をした。その結果、展望主義下位尺度では群の主効果が $F(2,122)=4.74$, $p<.05$ で有意となり、高群が中群や低群よりも有意に高かった (順に $t=2.78$; $t=2.62$)。しかし、現在主義下位尺度では3群間に有意差は認められなかった。

表4 各群の各下位尺度別の平均得点 (SD)

	高群	中群	低群
自己斉一性・連続性	4.21 (0.69)	3.62 (0.71)	3.33 (0.75)
対自的同一性	3.73 (0.75)	3.05 (0.64)	2.77 (0.92)
対他的同一性	3.50 (0.59)	3.11 (0.70)	3.13 (0.73)
心理社会的同一性	3.76 (0.62)	3.16 (0.51)	2.85 (0.66)
展望主義	4.30 (0.41)	3.98 (0.57)	3.98 (0.58)
現在主義	2.24 (0.67)	2.21 (0.59)	2.37 (0.49)

相関分析の結果

表5は同一性達成度，同一性感覚の4つの下位尺度，および時間的信念の2つの下位尺度の各時点間の相関係数を示したものである。表5からわかるように，同一性達成度は同一性感覚の4つの下位尺度および時間的信念の展望主義下位尺度と有意な正相関を示していた。また，同一性感覚の4つの下位尺度間には有意な正相関がみられた。

表5 各下位尺度得点間の相関係数 (N=125)

	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.
1. 同一性達成度							
2. 自己斉一性・連続性	.400**						
3. 対自的同一性	.436**	.655**					
4. 対他的同一性	.227*	.572**	.485**				
5. 心理社会的同一性	.520**	.679**	.728**	.606**			
6. 展望主義	.251**	.149	.119	.130	.147		
7. 現在主義	-.114	-.097	-.123	.023	-.091	-.333**	

* $p < .05$, ** $p < .01$

考 察

同一性感覚について

同一性達成度に基づく3群間の比較を行ったところ，MEISの4下位尺度のすべてにおいて高群は中群や低群よりも有意に高い得点を示した。また，心理社会的同一性下位尺度では，中群が低群よりも有意に高かった。これらの群間比較の結果は，表5の相関分析の結果と対応している。表5からわかるように，同一性達成度は同一性感覚の4つの下位尺度のいずれとも有意な正相関を示し，同一性達成度が高い者ほど，同一性感覚のそれぞれの下位尺度得点が高い関係にあった。これらの結果は，いずれも同一性達成度が同一性感覚と密接に関連することを実証するものである。

表5から，同一性感覚の4つの下位尺度得点同士の相関係数に注目すると，対他的同一性は他の3つの下位尺度のいずれとも有意な正相関を示しているが，相関値の大きさは他の下位尺度同士の相関値よりも小さいことがわかる。表1の項目をみると，本研究の同一性達成度尺度は「4. 私は，自分の意志で自分の生き方を選んでいる」や「5. 自分は，何かを成し遂げることができる人間だと思う」に代表されるように，他者との比較や他者からどう見られるかなどをあまり意識しない項目から構成されている。表2の同一性感覚尺度の自己斉一性・連続性，対自的同一性，心理社会的同一性の3つの下位尺度を構成する項目も，そのほとんどが他者との関係や他者との比較を意識しないで自分なりの価値基準で判断する項目内容であるように思われる。それに対して，対他的同一性下位尺度の項目は「3. 自分のまわりの人々は，本当の私をわかっていないと思う」や「11. 人に見られている自分と本当の自分は一致しないと感じる」のように，他者との関係を考慮したり他者との比較を意識して判断する項目内容である。この点で，対他的同一性下位尺度は同一性感覚尺度の中でも他の3つの下位尺度とは異なる側面を捉えているといえる。このために，他者との関係や他者との比較を意識しないで判断される同一性達成度は，人間関係に関わる同一性の側面（対他的同

一性)とあまり高い正相関を示さなかったのではないかと考えられる。

時間的信念について

時間的信念の2つの下位尺度別に同一性達成度の3群間比較を行った結果、展望主義下位尺度では高群が中群と低群よりも有意に高いことが示された。しかし、現在主義下位尺度では3群間に有意差はみられなかった。前者の結果から、同一性達成度の高い者は展望主義の傾向が強いといえる。しかし、同一性達成度の低い者は現在主義の傾向が強いという逆の関係は成立しなかった。これらの結果の相違から、展望主義傾向と現在主義傾向は必ずしも表裏関係になっていないことが示唆される。表3の項目をみると、「1.今をしっかりと生きることが、将来を明るくすると思う」(展望主義)や「2.今が楽しければ、それでよいと思う」(現在主義)のように、展望主義も現在主義もどちらも現在を大切にしていることに違いはないように思われる。両者の相違は、現在主義が現在だけを重視して、現在から未来への連続的なつながりを考慮しないのに対して、展望主義が現在から未来への時間的連続性や一貫性を重視するところにある。表1の同一性達成度尺度項目の中には、「1.私は、目標を持つと、その実現に向かって頑張る方である」や「7.自分には、まとまりと一貫性があると思う」などのように、過去から現在や未来につながる時間的連続性や将来の目標を実現するための努力の持続性を問う項目が含まれていた。おそらく、同一性達成度尺度と展望主義下位尺度は時間的連続性を共有していたのであろう。このことが同一性達成度と展望主義の関連を高め、現在主義との関連を低めた原因であると考えられる。

引用文献

- エリクソン, E. H. 小此木啓吾(訳編) 1973 自我同一性 誠信書房
(Erikson, E. H. 1959 *Identity and life cycle*. New York: International University Press.)
- 大野 久 1984 現代青年の充実感に関する一研究—現代日本青年の心情モデルについての検討—
教育心理学研究, **32**, 100-109.
- Rappaport, H., Enrich, K., & Wilson, A. 1985 Relation between ego identity and temporal perspective.
Journal of Personality and Social Psychology, **48**, 1609-1620.
- 下山晴彦 1986 大学生の職業未決定の研究 教育心理学研究, **34**, 20-30.
- 下山晴彦 1992 大学生のモラトリアムの下位分類の研究—アイデンティティの発達との関連で—
教育心理学研究, **40**, 121-129.
- 白井利明 1997 時間的展望の生涯発達心理学 勁草書房
- 杉村和美 2001 関係性の観点からみた女子青年のアイデンティティ探求—2年間の変化とその要因—
発達心理学研究, **12**, 87-98.
- 谷 冬彦 2001 青年期における同一性の感覚の構造—多次元自我同一性尺度(MEIS)の作成—
教育心理学研究, **49**, 265-273.
- 都築 学 1993 大学生における自我同一性と時間的展望 教育心理学研究, **41**, 40-48.